

日本マス・コミュニケーション学会 第37期第2回研究会（次世代委員会企画）
外国人留学生は日本のメディア、ジャーナリズム研究をいかに変えるか
—研究環境の課題を踏まえて—

日時：2019年12月14日（土）14:00～17:00（13:30開場）

場所：上智大学 四谷キャンパス 2号館5階508号室

https://www.sophia.ac.jp/jpn/info/access/accessguide/access_yotsuya.html

共催：上智大学メディア・ジャーナリズム研究所

報告者：沈霄虹（上智大学）

討論者：賈曦（長崎県立大学）、王冰（北海道大学）

王楽（東京大学大学院）、申周和（立教大学大学院）、アルン・デソーザ（上智大学大学院）

司会者：国枝智樹（上智大学）

日本政府の留学生受け入れ計画にともない、21世紀に入って外国人留学生の人数が急増している。日本学生支援機構（JASSO）によれば、2018年5月1日時点の留学生数は298,980人（前年比12.0%増）、出身地域別にみれば、アジア地域からの留学生が93.4%、欧州・北米地域からの留学生が4.5%となっている。そのうち大学院生は50,184人（前年比8.2%増）であり、その割合が上昇しているのが近年の特徴のひとつである。そして多くの留学生が来日後、社会学やメディア・ジャーナリズム系（以下、メディア系）の大学院に進学することを選んでいる。

それにもなると、日本マス・コミュニケーション学会における外国人研究者の存在感も高まっている。具体的にみると、2001年1月から2017年7月まで『マス・コミュニケーション研究』に掲載された投稿論文197本のうち、外国人研究者の論文は29本で全体の15%を占めている。また、過去5年間の学会大会における個人発表のうち、3割以上を外国人研究者が占めていて、そのほとんどが博士後期課程の在籍者である。

また、メディア系の大学院には、中国人留学生の割合が高いという特徴がある。メディア系大学院における修士論文提出者の出身地を見ると、上智大学大学院文学研究科新聞学専攻における中国人留学生の割合は48%に達している（2001～2017年度）。その一方で近年、メディア系大学院の博士後期課程に進学を希望する大学院生は、全体的にみて減少傾向にある。

以上のような現状を背景として、本研究会ではまず、沈霄虹会員がメディア系大学院における外国人留学生を取り巻く研究環境や教育環境の現状を報告したうえで、今後の展望をシンポジウム形式で議論する。討論者は、メディア系大学院で専任教員として働く2名の中国人研究者と、博士課程に在籍する3名の外国人留学生（中国、韓国、インド出身）である。次世代の外国人研究者が日本で活躍し、メディア研究やジャーナリズム研究を活性化していくためにはどうしたらいいか、具体的に考えていきたい。

本研究会はどなたでもご参加いただけます（事前申し込み不要、参加無料）。ふるってお越しください。